



何処までもやせたくて②

エフ／宝泉薫

第13話

他の子がやせるのは・・・

家庭教師のバイトが入った。

数日前、東京の伯母から電話が来て、
「知り合いのお嬢さんが、今度、高校受験なのだけど、
家で勉強を見てくれる人を探してて。
やってみる気、ないかしら？」
って。

自分にできるかな、って気もしたけど、すぐにやることにした。

今はいろんなことに挑戦したいし、買いたいものもある。
誰かを教えるってことにも、少し興味を感じたし。

じつのところ、伯母は、私がファミレスのバイト、
それも夜勤をやったりしてるのが不満みたいで、
その代わりになれば、という思惑もあったみたいだけど。

私は、両方やるつもり。
今は何でも頑張りたいし、暇な時間を作りたいから。

で、昨日がその初日だった。

相手の子が、不良っぽかったりしたらどうしよう、なんて思ってたけど、全然そんなことなく、ひと安心。

生徒の彩華ちゃんは、素直で大人しくて、勉強への意欲はちょっと足りないけど、志望校へは十分、合格圏内のようなだから、成績は現状維持でもいいみたい。

初対面のわりには仲良く話せたし、このバイト、けっこうおいしいかも、って思った。

ただ、ちょっと困ったことも。

彩華ちゃんは、少しぽっちゃりしてて、そのせいか、私の体型と食生活に、すごく興味を示してきたのだ。

きっかけは、休憩時間に私が取った行動。
クッキーとコーヒーを振舞っていただいたのだけど、
「先生って、甘いものが嫌いなの？
少ししか食べないし、コーヒーもブラックだし」
と、言われた。
「んー、そうでもないんだけどねー。
カロリーとか気になるし、今、ダイエット中だから」
その言葉に、彼女が食いついてきて・・・

そこからは、怒涛の質問攻め。
勉強もこれぐらい熱心ならいいのに、って思うほど、いろいろ聞いてきた。

「どうして？ そんなにやせてるのに。
ダイエットの必要なんで、全然ないですよー」
「前は何キロだったの？ えー、その頃からやせてたんじゃないですかー」
「体脂肪率って、どうやって計るの？ BMI？ 何ですか、それ」
「甘いものって、やっぱり太るんだ。このクッキーとか、
何カロリーあるんだろ」

私にとってはけっこう得意分野だし、ちゃんと答えるものだから、
彩華ちゃんはすっかり感心してくれたみたいで・・・
「なんか、勉強よりもダイエットのやり方、教わりたくなっちゃった。
私も、先生の真似してれば、やせられるかなあ」
なんて言葉まで飛び出して。

そのときの私の気持ちといえば・・・

「やせてる」って言われたことは嬉しかったけど、
真似されるのは困る、って感じ。
私は自分がやせたくて仕方なくせに、
他の子がやせるのはイヤ、って思ってしまう。

高校時代にダイエットしたときも、母や妹に、
高カロリーの料理を作って食べさせてたりしてたし。
周りが太っていれば、自分がやせて見えるから、ってことなのか、
ミヨーに安心できたりする。

でも、その一方で、そういう自分が大嫌いだったりもして。

だから、無邪気にうらやんで、聞いてきてるだけの彩華ちゃんに、
「今は育ち盛りなんだから、ダイエットなんて考えないほうがいいよー」
なんて、キレイごとを言って、
真似させないようにしてる自分に、辟易してしまった。

中3相手にライバル意識持つなんて、情けなさすぎ。

だけど・・・

他の子がやせるのは、やっぱりイヤ。

自分だけが、やせていたい。

もしかして、カテキョのバイトに来るたび、こんな気持ちになっちゃうのかな。
って考えると、少し苦痛だ。

そこでふと、思いついたこと。

そうだ、他の子が真似できないくらい、やせちゃえばいいんだ。

実際、体重を聞かれて、今の数字を言ったら、

「30キロ台なんて、ありえない。

私はせめて、一度でいいから、40キロ台になってみたいなあ」

彩華ちゃんは言ってたし。

うんうん、40キロ台で満足してね。

成長期の子供が、過激なダイエットなんかしちゃダメだから。
なーんて。

私、やっぱり、困るんだ。

他の子がやせるのは・・・

第14話

骨との再会

「まだダイエットしてるの？
骨が出てきちゃってるじゃない、胸とか、腰とか」

スポーツクラブで、また、やせすぎを指摘された。

前に、私のことを「ガリガリ」って言ったオバサン。
会うたびに言われてる気もするけど、正直、めんどくさい。
心配してくれてるにしても、ありがた迷惑だし、
もしかしたら、嫉妬なのかもしれないし。

でも、そのときはピクッと反応してしまった。

そして、即チェック。
本当に、骨が出てきてるかどうか、
鏡を見たり、自分で体を触ってみたり。
鏡を見た感じでは、そうでもない気がしたけど、
触ってみると、たしかに少し出てきてるのがわかる。

これは正直、嬉しい!!

三月に二度目のダイエットを始めてから、骨と再会することが、
ひとつの夢であり、目標だったから。

変に思われるかもしれないけど、私は自分の骨が好き。
肋骨とか、腰骨とか、くっきりしてくればくるほど、
やせたことを実感できるし、安心できる。

そう、骨はダイエットの成果を示すバロメーターであり、
精神安定剤のようなものなのだ。

二年前、ダイエットしたときも、
それまで肉に埋もれてた骨が出てくるのが、嬉しくて嬉しくて。

夏休み明け、35キロ台になって登校したとき、
椅子に座るのがちょっと痛くて驚いたけど、それすらも嬉しかった。
友達に肩や背中を触られ、
「骨だけじゃん、大丈夫？」
なんて言われるのも、自分が特別な存在になれたみたいで、
そこまで頑張ってる自分が、少し誇らしかった。

服を着たときの、鎖骨や腰骨にひっかかっている感触も懐かしいな。

だけど、その後の入院で、無理やり太らされた私。
大好きな骨が、どんどん肉に埋もれていくのが、悲しくて悲しくて。
いっそ、鏡を壊したり、ナイフで肉を削れたら、とさえ思った。

そして、もう、二度と会えないのかなあ、って。

あれから一年半、また会えたんだね。

でも、まだまだ満足できるレベルではない。

35キロ台までは、あと3キロ近くあるし、

最近は、それでも足りなくて、

32キロぐらいにならなきゃいけない気がしてきている。

そのためには、脂肪はもちろんだけど、筋肉だってそんなに欲しくはない。

骨を見たり、触ったりするのに、邪魔になるから。

さすがに「骨と皮」だけになるのはよくないとしても、

それに近い体が、理想だから。

もう一度、骨を確かめたくて、裸になり、鏡の前に立ってみた。

やっぱり、ダメだ。

この程度で、喜んでちゃいけない。

アバラとか、骨盤とか、形が全部わかるくらいじゃないと。

落とせる肉は、全部落としてしまわないと。

じつは、ダイエットのモチベーションを高めてくれるイベント（？）も、

二日後に控えていて・・・

のんびりしては、いられない。

骨との再会は、ほんの兆しにすぎない段階。

本当に出会えるまで、もっともっと頑張らなくちゃ。

第15話

やせすぎバッシング

ゴールデンウィーク後半は、混乱の連続だった。

初日は、雑誌の撮影。

ダイエット特集の読者参加企画に応募したら、
ラッキーにも誌面に登場できることになって。
ワクワクしながら、その編集部に出かけた。

企画の内容は、私を含めた五人の読者が体験談を語り合う、というもの。
各自のプロフィールに付けるための、水着姿の撮影もあるらしく、
まだまだ理想の体型になれてない私としては、少し憂鬱だったけど。
憧れてるモデルさんと同じ雑誌に載れるだけで、気持ちは舞い上がってた。

それに、他の人が自分よりやせてたらイヤだなあ、と、心配もしてたけど、
渡された資料で身長体重を見た感じでは、自分が一番細いかも、って。
ちょっぴり、優越感。

でも・・・

座談会は途中から、変な雰囲気になってしまった。

私が、最近の食生活について話していたら、

「それって、栄養足らなさすぎじゃない？
体重も一気に減ってて、ちょっと過激すぎる気もするんですけど」

と、指摘する人がいて、
そこから、みんなが口々に・・・

「目標が35キロなんて、無茶すぎるよ。今でも、十分細いのに」

「拒食症になっちゃうから、気をつけてね。私の友達にもいたけどさ」

「そういえば、職場の先輩に、拒食から過食になって、今、
毎日吐いてるって噂の人がいるよ」

なんか、私が今にも病気になりそう、というか、
すでに病気みたいな言い方をされて、ショックを受けた。

「大丈夫。無理はしていないし、体調も悪くないから」
と、説明しても、なかなか信じてくれず、
そのうち、涙目になってくるのが、自分でもわかって・・・

司会をしていた編集の人が「そろそろ話題変えようか」って言ってくれなかったら、
その場で泣き出してたかもしれない。

そんな気分を抱えたまま、個別の撮影に。

でも、プロの人にメイクしてもらったりしてるうちに、気分が持ち直してきた。

そして、何より嬉しかったのが、カメラマンの男の人からのひとこと。

「いやー、細いねえ。

Ｙちゃんとかと、変わんないくらいじゃない」

って、明るくあっけらかんとした調子で。

やっぱりというか、別に病的には見えなかったみたいで、ひと安心。

それに何より、

「Ｙちゃん」というのは、この雑誌の読者モデルで、

私が憧れ、目標にしてる人だから。

お世辞混じりだとしても、嬉しい。

そして、もうちょっとやせれば、Ｙちゃんを超えられるんだ、

もっともっとダイエットしなきゃ、って思った。

とはいえ・・・

座談会でみんなに言われた言葉を、すっきりと忘れられたわけでもない。

今の私は、二年前、強制的に入院させられた体重まで、あと2キロぐらい。
見る人によっては、病的に思われかねないところまで近づきつつあるのかもしれないし、
また、誰かに邪魔されるんじゃないか、という不安がある。

医者でもないのに、勝手に診断して「拒食症」とか何とか、病名をつけたりする誰かに。

そういえば、Ｙちゃんについても、ネットとかでいろいろ言ってる人がいる。

「あの細さは、異常。拒食らしいよ」
「食べたもの、全部吐いてるんだって」

本当のところは、どうなんだろう・・・

あ、そうだ。
せっかく、彼女のことを知ってる人たちに会えたのだから、聞いてみればよかった。

特にカメラマンの人は、Ｙちゃんのこと、よく知ってるみたいだったし。
私が、笑顔の作り方とか、スタイルよく見せるコツとか、
いろいろ聞いたりしてたせいか、最後に名刺をくれて、
「知りたいことがあったら、電話してね。ダイエットのアドバイスはできないけど（笑）」
なんて言っていたから。

ちょっと勇気があるけど、本当に電話しちゃおっかなあ・・・
と思って、携帯を取り出した。

あ、メールが来てる。
サークルの副部長からだ。

第16話

極細モデルYちゃんの謎

「やっぱり、ヒマだから、会わない？」

そんな一文で始まっていた、S先輩のメール。

彼は出身地が近いこともあって、後輩の私とよくしゃべってくれている。

共通の話題も多いし、訛りを気にしないで済むから、話していても楽な感じ。

ゴールデンウィーク前に、冗談っぽく、

「後半はヒマそうだから、デートしてもらおっかなー」

なんて言われてたから、もしかして？ とは思ってたけど、

まさか、本当に誘われるとは予想してなかった。

でも、とりあえず、断る理由はない。

副部長をしているだけあって、テニスも上手いし、ルックスもまあまあ。

何より、いろんな意味で大人だ。

一浪している四年だから、私より、4コ上。

なんか、頼れそうな気がする。

それに、高校まで、親に恋愛を禁止させられてきたから、

大学では絶対、誰かと付き合うんだ、って、決めてた。

少しやせて、自信もついたし、今がチャンスなんだ、きっと。

で、翌々日、デート。

正式に付き合おう、ってことになった。

でも・・・

観た映画の内容より、ちょっと食べ過ぎてしまったディナーの味より、
心に残ったのは、やっぱり、ダイエットの話。

例の座談会で、いろいろ言われたことを話したら、

「頑張ってダイエットしたのに、評価されないのは、つらいよね。

全然、病的な感じはしないから、大丈夫だよ」

優しく慰めてくれた。

「そうなんですー。病気になるような無茶なことはしてないし。

ただ、モデルさんとかの中には、かなり無茶なことしてる人もいますって」

「そうらしいねー。食べたあと、吐くとか。

Ｙちゃんなんかも、それであんなに細いんだっていうし」

先輩の口から「Ｙちゃん」の名前が出て、ビックリ!?

「それ、どこで知ったんですかー？」

「いや、Ｙちゃんと同じ大学のＱから聞いたんだよね。

キャンパスでは、有名な噂なんだって」

先輩は「あくまで噂だから、本当のところはわかんないよ」と付け加えたけど。

人生初デートの緊張でせっかく忘れかけていた、疑いの気持ちが蘇ってしまった。

そんな噂、デタラメであってほしいと願いつつ、なぜか、

トイレで吐いてるＹちゃんの苦しそうな姿が浮かんできて・・・

家に帰ってからも、その気分をひきずり続けた私は、
翌日、つまりゴールデンウィーク最終日、
あのカメラマンの人に電話をかけることにした。

Gさんというその人は、ちょっとびっくりしてたけど。
私もぶしつけなことは承知してたから、単刀直入には聞かず、
このあいだの感想など話したりしながら、それとなく水を向けてみる。

すると・・・

Gさんは、少し沈黙したあと、

「要は、摂食障害じゃないか、って話でしょ。
そういう噂、たしかに聞いたことあるけど、吐いてるところを見たわけでもないし、
本当のことはわからないよ。
ただ、普通の女の子の中に、食べて吐いてるコが一定の割合で存在するように、
モデルの中にも、そうなっちゃう人はいるはず。
たぶん、その割合も普通より高いんだろうしね。
でも、ファンなら、Ｙちゃんのこと、信じてあげてほしいな」

たしかに、信じたい、信じてるけど・・・

モデルには摂食障害の人が多く、Ｙちゃんにだってその可能性はある、
という意味の発言に、少なからずショックを受けた。

でも、そのあと、もっとショックな言葉が。

「そういう君こそ、大丈夫？ 編集の人が、
食生活とか、なりたい体型のイメージとか、ちょっと極端な感じで、
このままエスカレートすると、拒食症になっちゃうんじゃないか、
って、心配してたけど」

私は即座に「大丈夫ですよー」と、声を思い切り明るくして、
「ちゃんとバランス考えて食べてるし、骸骨になりたいわけじゃないんです。
自分が納得できた段階で、ダイエットはやめますから」
と、強調してみたのだけど。

「そっかー。なら、いいんだけどね。
何年か前にも、あの雑誌のダイエット企画に出てくれたあと、

拒食症になって、入院したコがいたから。

ホント、気をつけるんだよ。今でも、十分すぎるほど細いんだから」

自分の話題になってしまったのが、なんとなくイヤで、
テキトーに、電話を終わらせてしまった。

そのあと、なんだか、どんよりした気分が残ってしまって・・・

もしかして、私、やせすぎなのかな。

自分の目で確かめてみるため、
下着姿になって、鏡の前に立ってみると・・・
全然、やせすぎじゃなかった。
むしろ、少し太ったくらい。

そこで、体重計に乗ったら・・・
38.3キロ。
座談会の時点では、37.1まで落とせてたのに。

デートのとき、
「こういうときぐらいは、好きなだけ食べてもいいんじゃない？」
という言葉に乗せられて、食べ過ぎたのが、今頃になって響いてきたのだろうか。

だから、周囲の言葉をいちいち気にするのは、もうやめよう、と、決意した。
雑音を気にしては、ダイエットはできないから。
もっと、ストイックにならなきゃ。

混乱のゴールデンウィーク後半が、こうして終わった。

第17話

ストイックな食べ物

昼下がり、サークル室に行ったら、女の先輩二人からお茶に誘われた。

先輩たちはケーキがお目当てだったみたいだけど、
もちろん、私はお付き合いするわけにはいかない。

「コーヒーだけで、いいです」
と、言うと、
「ダイエットしてるの？」
という予想通りの突っ込みが来た。

でも、もう一人の先輩から飛び出した言葉は、完全に想定外。

「えー、知らないの？ ダイエットしてるんだよね。
だって、この子、すごくやせたじゃない。
ほら、腕なんて、うちの半分だよー」

と、私の二分袖から出た腕を指差したあと、

「もしかして、S先輩が細い子が好みだと知って、頑張ったの？
最近、付き合い始めたんでしょ。
大人しそうなタイプなのに、意外とやるじゃん」

ちょっとからかうような調子で、私に話しかけてきたから。
二重の意味で、驚いた。

ひとは、一週間もしないうちに、S先輩とのことが知られてること。
まあ、噂なんてそんなものだろうけど。

もうひとは、S先輩が細い子が好みだってこと。
デートのときには、私の体型のこととか、何も言ってなかったのに。

ただ、興味を持ってもらえたのがダイエットの成果だと思えば、素直に嬉しかったし、
もっとやせたい私にとっては、むしろ好都合だ。
これからダイエットを続けても、S先輩は怒らないだろうし、
もっと好きになってくれるかもしれない。

少なくとも、目の前にいる女の先輩みたいに、
「自分だけ、やせようなんて、ずるいよー。
ケーキとか、欲しいって思わないの？」
なんてことは、言わないはず。

私は、さも残念そうに、
「甘い物って好きなんですけど、さっき、お昼をしっかり食べたんで」
と、例によって、嘘でごまかした。

本当はここ数日、お昼は抜いているし、甘い物も、以前より好きじゃなくなってきたけど。

だから、ケーキを食べる先輩たちの姿を、
「そんなもの食べてるから、やせられないんじゃない」
と、醒めた目で見ていた。

我ながら、性格悪いなあ、とも思うけど、
欲望のままに食べるのって、あさましいというか、
昼下がりにケーキでお茶するのって、あまりストイックじゃない気がして。

連休中にいろいろあって、私が決めたのは、
よりストイックな生活を目指す、ということ。
あらゆることに真面目に頑張りたいから、
食欲なんかに負けて、だらしない暮らし方は極力したくない。

寝る間も惜しんで、勉強にサークルにバイトに恋愛に、そして何より、
ダイエットに頑張りたい。

だから、数日前「食べていいもの・悪いもの」のリストを更新してみた。
ダイエットを始めた頃から、簡単なリストは作ってあったけど、
その基準をもっと厳しくして、ストイックな生活に向かない食べ物は排除した。

そう、食べ物にも、ストイックなものとそうじゃないものがある。

カロリーの高そうなものや、脂っこいものは、パス。
主食で許されるのは、雑炊かおそばくらいで、
肉も鳥のささみや白身魚くらいしか摂っちゃいけない。

揚げ物はもってのほかだし、
調味料も、マヨネーズやケチャップは厳禁。
あとは、野菜、海藻、きのこ、豆類、乳製品といったものから、
カロリーや脂質のなるべく低いものを組み合わせて、
お腹がいっぱいにならないように食べる。

それでも足りなければ、水を飲めばいい。
水こそ、究極の「ストイックな食べ物」だから。

問題は、大好物のアイス関係をどうするかだけど・・・

そういうものは1食分として、カウントすることにした。
つまり、アイスを1個食べたら、1食抜かなければならない、というわけ。

それ以来、体重の減り方が変わった。
以前は、リバウンドする日があったけど、
ここ五日間は、連続で減り続けている。

今朝は、36.2キロ。
35キロ台まで、あとちょっとだ。

そんなことを考え始めたら、こうしてお茶してる時間をもったいなく思えてきた。
コーヒーはブラックだけど、なんか、じっとしてると太りそうで。

私はどうにも我慢できなくなり、
まだまだ一時間ぐらいはこの店で粘りそうな先輩たちに、
あいさつして、そそくさと席を立った。

「すみません。そろそろ、バイトに行く時間なんで」

バイト先ではなく、ジムへ行くために。

第18話

サイズがない幸せ

二度目のデートは、ショッピング&夕食。

お付き合いを始めた記念にプレゼントをくれるというので、洋服をねだってみた。

じつは今、サイズが合う服がなくて、困っている。

クローゼットにあるのは、今より10キロ近くも太っていたときに着ていた、Mサイズがほとんどだから。

以前、ダイエットしたときに、買ったり、お直ししたりした服は、入院中、母親に捨てられてしまった。

東京で、新しく買ったり、お直ししたりしたものの、まだまだ足りない。

だから、洋服を買ってくれるというのは、現実的にも嬉しかった。

ただ、男の人と一緒に洋服を見るなんて、生まれて始めてだから、すごい緊張というか、プレッシャー。

ブランドによっては、すごく細身にできてるものもあるから、試着のとき、Mサイズでもきつかったりしたらどうしよう、せっかく細い子だと思われてるのに・・・なんて、いろいろ考えてしまっ

でも、大丈夫だった。

というより、合う服がなかった。

ワンピースもスカートも、何を着てもゆるくて、
最終的に選んだのも、ウエストをかなり詰めてもらわなければならなかったほど。
お直し代まで出してくれたS先輩は、
「細すぎ、っていうのも、大変なんだね」って、感心したような、あきれたような・・・

プレゼント代がよけいにかさんで、申し訳なく感じつつも、
その「細すぎ」って言葉が、心地よく響いた。

そう、ダイエットには、そういう愉しみもある。
普通のサイズがゆるくなって、お直ししたり、ベルトの穴を新しくあけたり。
「サイズがなくなる幸せ」っていうのかな。
私だけかもしれないけど、それが快感。

その「快感」を教えてくれたのも、二年前のダイエット。

夏休み明けに登校するとき、制服を5センチ以上詰めてもまだゆるく、
安全ピンで留めてるのを友達に見られて「ほっそーっ」って言われたり。
ブティックで「もっと小さいサイズ、ないですか」と聞いて、
店員さんを、ビックリ&困惑させたり。
優越感も少し混ざってるけど、
何より「やせてる自分」を実感できることが、純粹に幸せだった。

そんな幸せを取り戻せつつあることが、デートそのものより楽しく思えて。
彼にはまた、申し訳なく感じたけど、
女の先輩の話では「細い子が好み」なんだよね。

そう、やせれば彼にも喜んでもらえるんだ。

そして、夕食。

前回は、イタリアンのディナーを食べ過ぎて、後悔してしまったから、

今回は、我儘を言って、和食系の上品な居酒屋にしてもらった。

枝豆と、海鮮サラダ、大根の煮物、そして、ウーロン茶。

彼は「それだけで、足りるの?」と言ってたけど、

それでも、多すぎるくらいだ。

食事中、体型の話題になり、思い切ってきてみる。

「男の人って、意外とぽっちゃりした子が好きでしょ。先輩もそうなんですか」

「いや、僕は逆。細いほうがいいなー。細ければ細いほどいい、っていうか」

やっぱり、そうだったんだ、という安心と、さらなるプレッシャー。

「細ければ細いほど」ってことは、まだまだやせなきゃいけないってことだもの。

でも、ダイエットをやめろと言われるよりはいいし、

頑張れば頑張るほど、好きになってもらえるなら、モチベーションも上がる。

「じゃあ、もっと頑張ってダイエットしなきゃ」って言うと、

ちょっと驚いた顔で、

「もう、十分でしょ。服のサイズがないくらい細いんだもん。

ダイエットもいいけど、あんまり無理しないでね」

「無理してなんか、ないですよー。バランス考えながら、けっこう食べてるし。

運動もしてるから」

そしたら、こんな嬉しい言葉が返ってきた。

「そういえば、テニスもすごく上達したよね。練習も真面目で。
そういう頑張り屋なところ、すっごくいいと思うよ」

みんなに内緒でテニススクールに通ってるおかげもあるから、
少し後ろめたかったけど、
「頑張り屋」と言われたことに、大感激。

子供の頃から、親に「もっと頑張りなさい」とは言われても、
「頑張り屋」とは言ってもらえなかったから。
数日たった今も、それが心に残ってる。

そして「細ければ細いほどいい」って言葉も。

プレゼントしてもらった服を着てみたら、お直ししたはずなのに、
ちょっとゆるかった。
それが嬉しくて、もっともっとやせなきゃって、決意を新たにする。

そうだ、家にあるMサイズの服は、全部、処分してしまおう。
どうせもう、一生着ることはないんだから。

さっき体重を計ったら、36.1キロだった。
二年前の最低（最高？）記録まで、あと900グラム。
次のデートまでには、達成したい。

いや、達成しなくちゃいけない。

第19話

体型か、体力か・・・

「そんなに細いのに、よくあれだけ動けるね」

試合のあとの交歓会で、相手チームの人に言われた。

毎年恒例になっているらしい、他のテニスサークルとの親善試合。

私にとっては初めての、試合らしい試合だ。

二年生の先輩とダブルスを組み、なんとか勝つことができた。

そして、この言葉。

喜ぶべきなのに、ちょっと複雑。

試合をしてみて、体力が落ちてることに気づかされたから。

追いつけると思ったボールに、足がついていかなかったり、

全力で決めに行ったショットが、ネットに引っかかったり。

ペアを組んだ先輩は「始めてまもないのに、かなり上手いよ」って言ってくれたけど、

内緒でテニススクールに通ってるおかげで、もう少し上手くなってるつもりだった。

二週間ぐらい前の自分なら、もっと楽に勝てるはずだったのに。

原因は・・・うすうすわかってる。

たぶん、一気に体重を落としすぎたからだ。

二週間前の体重は、36キロ台。

それが試合の三日前には、34.3まで落とせた。

嬉しくて仕方なかったけど、体力も落ちた気がして、試合のことが心配になり、かなり無理して36キロ近くまで戻したのに。

完全には、体力を回復できなかったみたいだ。

その夜、バイト先で、なみちゃんに、相談してみた。

そしたら、

「ダイエットのしすぎだよ。私はむしろ、太りたいほうだけど、1キロ減っても、体がきつって感じるよ」

いつもの私なら、なみちゃんに心配されても、

「そんなことないって。体が軽くなって、前より動けるよ」

って言うところだけど・・・

それもそうかもなあ、と。

さすがに30キロ台半ばまでくると、

体力はキープしたまま、体重だけ落とすのは難しいのかもしれない。

ふと、しばらくこのぐらいの体重を維持しながら、体力作りに励んでみて、改めて、減らすようにしようかな、という思いがよぎった。

でも、同時に、せっかくいいペースでやせてきたのに、

ここでやめるのはもったいないよ、って気持ちも。

体型か、体力か・・・究極の選択。

とりあえず、自分の体を見て、決めることにした。

家に帰り、鏡の前に立ってみる。

全然、やせてない。

34.3キロのときは、肋骨とかもう少しくっきりしてたのに。

と、思いながら、体重計に乗ったら、35.2キロ。

やっぱり、35キロ台じゃダメってことだな。

そういえば、この体重、二年前の最低記録だ。

それを超えるようにダイエットを再開したのに、ここで納得してちゃ、意味がない。

よくよく考えてみたら、体力が落ちたといっても、

テニスができなくなったわけじゃないし、

試合にも勝てた。

なんの問題もない、ってことだ。

これ以上は体力をダウンさせないようにして、体重だけ減らすようにすればいい。

もし、それで体力が落ちたら・・・

いや、当分は試合もないし、誰に迷惑をかけるわけでもないから構わないはず。

でも、なるべく体力も保ちたいな。

バイト先やジムでも、同じ意味のこと、言われたことがあるけど、

心地よくて自信がつくあの言葉を、もっともっと、誰からも言ってもらえるように。

「そんなに細いのに、よくあれだけ動けるね」

それは、最高のほめ言葉だから。

第20話

モデルと骸骨の境界

カテキョのバイトから帰ったら、雑誌が届いていた。

先月、読者企画に参加したファッション誌。

そういえば、編集の人が、

「掲載誌は本屋さんに並ぶ前に、送れると思う」

って、言ってたっけ。

ドキドキしながら、載ってるページを見つけると・・・

そこには、一ヶ月前の自分がいた。

正直にいえば、ショック。

紹介記事には「これ以上、やせる必要なし」という、

専門家の人のコメントも記されていたけど、

水着姿の写真は、納得できるスタイルからは程遠い。

今は、あのときより3キロほど減ってるから、もうちょっとマシなはずなのに。

取材と発売の時期がずれるのは、仕方ないとはいえ、

今の自分で載りたかった。

このときより、もうちょっとやせたんだ、

ってことを、誰でもいいから伝えたくて。

気がついたら、カメラマンのGさんに電話していた。

「このあいだは、いろいろありがとうございました。
掲載誌、届きましたよー」

とりあえず、お礼を言うと、
「自分の写真見て、どうだった？」
一瞬迷ったものの、正直に答えた。

「実物よりキレイに撮っていただいて、嬉しいんですけど・・・
やっぱり、写真って太って写るんですね。
ちょっと、へこんじゃった」

そしたら、Gさんは、
「何言ってるの。
たしかに写真は、太めに写るけど、それでも細いよ。
他の子と比べたって、一番細いでしょ。
自分で見て、そう思わなかった？」

一番細い、というお世辞は一瞬だけ心地よく響いたけど、
自分ではやっぱり、そんな気がしないから、
「全然、思わないです。
他の子のほうが、やっぱり細いんじゃないかって」

「・・・・・・・・」

ちょっと沈黙したあと、Gさんは話を変えた。

「ところで、体調はどう？ 無理なダイエット、してない？」

「元気ですよー。無理もしてないし。
あれからちょっとやせて、今、34キロ台なんです！」

「・・・34キロかー。そういえば、たしか、35キロが目標だったよね。
ってことは、これからはキープって感じかな？」

驚きと心配が入り混じったような言葉を聞いたら、
もっと驚かせて心配させたような、ミヨーな気持ち。

「うーん、まだちょっとやせたいんですよねー。
32キロぐらいになりたくて。あ、でも、無理はしてないですから」
明るい調子で、尝试してみた。

「・・・・・・・・・・」

さっきより長い沈黙。
そして、再び口を開いたGさんは、今までになく厳しい語調で、
「あのさー、一度しか会ったことのない子にここまでおせっかいなこと言うのも、
どうかって思うけど、
160センチあって30キロ台前半って、絶対、やせすぎだよ。
このままだと、カラダ壊すし、下手したら死んじゃうから。
それに何より、キレイからも遠ざかっちゃう。
キレイになりたいんだよね？」

「もちろん、です。だからこそ、もっとやせたいんだもん。それに・・・」

必死に反論する私の言葉を、さえぎるように、
「だからね、細いほどキレイになれるって感覚が、間違いなんだって。
キミの憧れてる読モのYちゃんだって、これ以上やせないようにって、
編集部から言われてるくらいだし。
じつは彼女、前にかなり過激なダイエットをして、
撮影のたびにやせてるって感じの時期があったんだけど、
編集の人に言われたひとことがきっかけで、キープに切り替えたみたいだよ」

ますます有無を言わせない感じのGさん。
でも、それって、どんな言葉なんだろう・・・

第21話

続・モデルと骸骨の境界

「そのひとことっていうのはね、
僕達が求めているのは、美しいモデルであって、醜い骸骨じゃない、
って言葉だったらしいけど。
キミだって、モデルみたいになりたいわけで、骸骨を目指してるんじゃないよね？」

なんか、Gさんの言うことがひとつひとつナイフみたいに刺さって、心が痛い。
言葉を返せば、涙声になりそうで、黙り込むしかなかった。

聞きたいことはいっぱい山ほどあったのに・・・

特に、教えてもらいたいのは、
「それなら、モデルと骸骨の境界って、どこなんですか？」
ということだけど、
自分にとって、嬉しい答えは返ってきそうにない気がした。

黙ったままの私に、
「ごめん、ちょっと言い過ぎたね。
ただ、このあいだ、水着姿を見たときもちょっとやせすぎだと思ったし、
もう少し太ったほうが魅力的な気がしたから、
あれ以上やせたって聞いて、それはまずいんじゃないかって。
とにかく、もう、ダイエットは中止したほうがいいよ」

その言葉も、意外すぎる。
撮影のとき、スタイルをほめてくれたのは、嘘だったの、って。

もう、他人のいうことはアテにできない。
自分の感覚だけを信じよう。
私はまだやせてない、だから、もっとやせなきゃダメ。

Gさんの気分をこれ以上、刺激したくなかったから、
「わかりました。いろいろありがとうございます」
と、お礼を言って、電話を切ったものの、気持ちは釈然としなかった。

ダイエットのこと、手放しでほめてくれないにしても、
「頑張ってるね、でも、無理しちゃダメだよ」
ぐらいのことは言ってくれると期待してたのに。

最近、みんなして、私のダイエットをやめさせようとしてるみたいだ。
別に骸骨を目指してるわけじゃないし、まだモデル体型にすら程遠いのに。

時計を見たら、11時すぎ。
ちょっと、眠い。

そろそろシャワーを浴びて、寝る準備しようと思って、
ケータイを確認したら、メールが来てる。
彼・・・S先輩からだ。

「今夜、そっちに泊めてもらえないかな」

「えーっ!？」

思わず、声をあげてしまったほど狼狽して、眠気も吹っ飛んだ。

第22話

悪夢・・・のはじまり

「今夜、そっちに泊めてもらえないかな」

夜11時前に届いた、彼・・・S先輩からのメール。
友達と飲んでて、終電を逃しそうだから、
タクシーで行ける私の家に泊めてほしい、
という内容だった。

長く付き合ってる恋人同士なら、珍しいことではないかもしれないけど、
私達の場合は、まだ一ヶ月。
昼間に、家に来てもらったこともない。

だから、嬉しさより、困った気持ちが大きくて。
でも、困ってるのは彼のほうだから、断るわけにはいかない。

「わかりました。気をつけて」
と、メールして、準備にとりかかることに。

そのとき、ふと、別の不安がよぎった。

もしかして・・・求めて来られたら、どうしよう、って。

高校時代まで、恋愛禁止だった私は、S先輩以外の人と付き合ったことがない。
付き合ってる以上、いつかはそういうことも・・・とは思ってたけど、
こんなに早く、しかも突然、そうなるのはいやだ。

でも、これって完全な取り越し苦労で、彼は寝る場所を確保したいだけかも。
キスもまだだし、紳士的なほうだと思うから、こんな形ではそんなふうにはしないはず。
だけど、親に内緒で、そういう経験をすることに、
ほんのちょっぴり、快感めいた気持ちもなくはないっていうか。
母は怒るだろうし、父はガッカリだろうな。

とはいえ、やっぱり、いやだ。

不安は、シャワーを浴びている間も高まるばかり。
いつもより、お腹がぼっこりしてる。
カテキョのバイトのとき、断りきれずにケーキを食べたせいかな。

どうしよう。彼は、細い子が好きなのに。

体重を計ったら、34.7キロ。
朝より、500グラムも増えてるし。

泣きそうになりながら、彼のために酔い醒ましの冷たいスープを作り、彼のことを待つ。
何も起きないことを、心から祈りながら。

しかし・・・
祈りは通じず、不安は的中。

1時半ごろ、家に着いた彼は「シャワーを浴びたい」と言ったあと、
「突然すぎかもしれないけど、そのあとで、ちょっといい？」
それとなく、でもわかるように誘いかけてきた。

付き合ってる人を真夜中に家に入れた以上、うなずくしかない私。

それから起きたことは、あまりよく覚えていない。
でも、全然気持ちよくなんてなかったし、
ただただ、怖くて苦しくて、いけないことをしてるみたいで・・・

覚えているのは、彼が腕をつかんだり、腰のあたりを触ったりしながら、
「本当に細いんだね」
何度も言ってくれたことぐらい。

お腹のぽっこりが気になってたから、それには少しほっとしたけど、
とにかく早く終わって！ って、
そんなことばかり、考えていた。

彼のことは好きはずなのに。
突然なことをのぞけば、それなりに優しくしてくれてるはずなのに。
なぜ、苦痛や恐怖しか、感じないの？
せっかくの記念すべき夜に、そんな気持ちでいることが申し訳なくて。
経験不足で、臆病な自分が、いやでいやでたまらなくて。

なんとか終わってからも、その気分をひきずり続けた私は、
たった今起きた現実を認められずに、悶々としていた。

いっそ、これが夢ならいいのに。
悪夢なら、早く醒めてほしいよ。

第23話

悪夢・・・のつづき

そして、朝。

ほとんど眠れなかった私は、ぐっすり寝てる彼を置いて、買い出しに出た。
せめてもの償いに、おいしい朝食を作ろう、と思い立って。

最初は、冷蔵庫の中にあるもので、と考えただけど、
普通の男の人が満足しそうな食事を作るには、
食材も調味料も、物足りない。
おかげで、かなりの出費になったものの、
ベーコンエッグとフレンチトーストの朝食を、彼は喜んで食べ始めた。

でも、その途中・・・
「キミは、食べないの？」
私のお皿を見ながら、彼がポツリ。

「えー、食べてますよー」
「いや、さっきから、レタスをちょっとつまんで、プチトマトを1、2個食べたただけだよね」
「うーん、そんなにお腹すいてないし。それに、ほら、ダイエット中だから」

他の人はともかく、彼に対してなら、それで済むと思ってたのに。
返ってきた言葉は、他の人と同じ、いやむしろ、もっときついものだ。

「ダイエット、ダイエットって、そこまでやせても、まだやせたいの？
っていうか、絶対、やせすぎだよー。

前に、見えないところに肉がついてる、とか言ってたから、
そんなもんかなって思ったりしてたけど、昨夜エッチしてみて、
むしろ、逆じゃないかって。

どこ触っても、骨だけなんだもん。

ぶっちゃけた話、これ以上やせられると、女の子としての魅力を感じなくなっちゃいそうだし
」

一瞬、耳を疑う私。

「細ければ細いほどいい」って言ってたのに、あれは何だったの？

「本当に細いんだね」って、昨夜何度も言ってくれたのも、いい意味じゃなかったってこと？
この人だけは、やせたい私の味方だって信じてたのに。

黙り込んでいると、彼は言い過ぎたと感じたのか、

「ごめんね。傷つけたなら、謝るよ。

でも、まさかここまでやせちゃってとは思わなかったから。

ショックっていうか、心配っていうか。

だから、もう、ダイエットはやめようよ。

で、今度、おいしいもの、食べに行こっ。

もうちょっと太ったほうが、絶対いいって。

もともと、スタイル、すごくいいんだから」

一生懸命、説得してくれてる。

でも、私はなぜか、うわの空。

そんなこと言ったって、太ったら嫌いになるに決まってる。
好きになってくれたのは、ある程度やせてからの、30キロ台の私なんだし。

そのうち、ふと気づいた。

待てよ・・・

これ以上やせたら、女の子としての魅力を感じなくなる、ってことは、
ああいうことをしたい気持ちもなくなるってこと、だよね。
そっか、もっとやせれば、ああいうことから解放されるんだ・・・

「どうしたの。大丈夫？

ホント、きついこと言ってごめん。

でも、逆ダイエット、頑張ってみようよ。

僕も、協力するから」

うわの空のまま「はい」と答える。

まるで、悪戯を叱られてるのに、次の遊びが気になって仕方ない子供みたいに。

もちろん、逆ダイエットなんてするつもりはないけど、
返事をしないと、話が終わりそうになかったから。

でも、返事だけでは許してもらえず、
フレンチトーストまで食べさせられるハメに。
彼に喜んでもらえるよう、砂糖もたっぷり使っちゃったから、
気持ち悪くなるほど、胃に重く感じる。

「おいしいもの、食べに行こっ」って、
こういうものまで食べなきゃいけないってことなのかな。

そんなの、困る。
なんとか防がなきゃ。

精一杯の笑顔で、彼を送り出したあと、すぐにシャワーを浴び、体重を計った。

34.9キロ。
やっぱり、増えてる。

次のデートまで、もう、何も口にしちゃいけない。
やせなきゃ。
もっとやせなきゃ。
絶対にやせなきゃ。
彼がいっそ、魅力を感じなくなるくらい。

もう二度と、悪夢を見ずに済むように。

第24話

働いてはいけない体重

バイトの休憩中、店長に呼ばれた。

「最近、やせたみたいだけど、体調、大丈夫？」

またしても、私の体型や体調の話だ。

めんどくさいなー、と思いながらも、

「全然、大丈夫ですよー。体調、どんどんよくなってるし。

あの・・・仕事もそれなりにしてるつもりですけど」

「うん、仕事ぶりには何の問題もないんだけど。

ただ、あまりにも細いから、お客さんとか、いろんな人から、心配する声が出てたりしてね。

キミの場合、週に二日も徹夜してもらってて、それもやせちゃった原因なのかなって」

その指摘は、当たらずとも遠からず、って感じ。

だって、むしろやせるために、徹夜のバイト入れてるんだもの。

「それにさ、キミがちゃんと食事してるって、ほとんど見てないんだよね。

他のコは、バイトの特権で、うちの料理、しょっちゅう食べてるのに」

痛いところを、突かれた。

ファミレスでバイトしてて、こんなこと言うのもなんだけど、

ここの料理、カロリーも脂肪も高すぎて、ちょっと食べられない。

「・・・・・・・・えーっと、私って、こってり系、苦手なんですよ。

でも、家ではしっかり食べてるし、だから、大丈夫です！」

めいっぱい、明るく元気に言ってみる。

「うん、わかった。でも、ホント、気をつけてね。
これ以上、細くなると、店の制服、着られるのがなくなっちゃうからさ」（笑）

最後は冗談まじりに、話を終わらせてくれた。

たしかに、今の私は、7号でもぶかぶかで、
ベルトも自前のを使わせてもらってる。
そういうところも、店長は気になるのかなー。

それにしても・・・
お客さんとかが心配してる、って、何？
私には、ちょっと違う気がする。
仕事中、耳に入ってくるひそひそ声は、もっと気分のよくないものだから。

「わー、あの子、ほっそーい。でもちょっと、やばくない？」
「ホントだー。お前の肉、少し分けてやれよ」
いちゃいちゃするためのネタにするカップル。
それはまあ聞き流せるとして。

「なんか、病的なやせ方だよね。拒食症じゃない？」
「拒食とは限らないよ。過食して、吐いてるのかも」
勝手に、病名をつけてくる人たち、もいる。

一番ショックだったのは、
「きもーい。あんなの見てたら、食欲なくなっちゃわねー？」
「だよねー。てか、あんな骸骨、雇うなよって」
ギャル風の高校生に、大声で言われたこと。

え、まさか・・・そこでふと、気づいた。

店長の言う「お客さんの声」って、心配じゃなくて、苦情なのでは。
だとしたら、店長は私のこと、やめさせたいのかもしれない。
だから、遠回しにああいうことを言ってきたんじゃ・・・

そのあとはもう、仕事をしていても、気が気じゃなくて。
同時に勤務を上がったなみちゃんに、相談してみた。

「私、休憩のとき、店長に呼ばれたでしょ。じつはあれ・・・」
いろいろ説明して「どう思う？」ときいたら、
なみちゃんは、明らかに戸惑い気味で。
でも、一大決心をしたみたいない感じで、口を開いた。

「店長さんが気にしてるのは、お客さんじゃなくて、別の人に言われた言葉だと思うんだ。
あのね、これは本人には言わないで、って釘を刺されたんだけど。
この前、ちょっと聞かれたんだよね」

店長はなみちゃんに、私の体重をたずねたらしい。

「こないだ、店長さんのお友達って人が来たの、覚えてる？
別のお店で、店長やってるっていう。
あの人が、
すごくやせてる子がいるけど、大丈夫なのか？
って、言ってきたんだって。
その人のお店で、前に、倒れちゃった子がいて、大変だったらしくて。
なんかね、バイト中に意識がなくなって、救急車で運ばれて。
その子、26キロしかなかったんだって。
本社の人にも、なんで働かせてたんだ！　みたいに言われたらしいんだけど。
だから、店長さんもますます心配になったみたいで、
30キロ切ってるようなら、ちょっと考えないと、
って、思ったみたいだよ」

第25話

続・働いてはいけない体重

びっくりしたし、かなり不愉快だけど、ある意味、ひと安心。
まだ、そこまで細くないから。

「でね、お友達の体重のこと、勝手に教えるなんて、どうかと思ったけど、
店長さん、本当に心配そうだったから、
そんなに少なくはないはずですよー、
30キロ台はちゃんとあると思います。
って、言っちゃったんだけど、ごめんね」

「ううん、言ってくれて、助かったよー。
私が自分で言っても、なかなか信じてもらえないかもしれないし。
ホント、助かったー」

ホッとしたのか、一瞬、笑顔のなみちゃん。

でも、すぐに真面目な顔に戻って、
「だけどさー、店長さんも私も、めちゃめちゃ心配してるんだよ。
今だって、やせすぎだもん。
歩き方とかも、少しフラフラしてるし。
しかも、そろそろキープに切り替える、って言いながら、
ダイエット、ずっと続けてるでしょ。
もう、これ以上やせないで。お願いだから」
いつにも増して、真剣な口調と表情。

だけど・・・私はその言葉をちゃんと聞くより、他のことを考えてた。

もしかしたら、
世の中には「働いてはいけない体重」っていうものがあるのかも・・・

うん、たしかに、20キロ台はちょっとねー。
それも、26キロまでいっちゃったら、マジでやばい。
その点、私は大丈夫だ。
20キロ台まで、あと4キロぐらいあるし。

そうだ、どこまでやせればいいのか、なかなか決められずに困ってたけど、
そのあたりを、目標にしようかな。
30キロジャストか、ちょっと切るくらい。
店長の前で、体重計に乗るわけじゃないから、
多少のごまかしはできるはずだし。

ただ、フラフラして見えないよう、もっと注意しなくちゃ！
あと4キロくらい落としても、ちゃんと働く自信はある。
30キロくらいあれば、クビにはならないで済むんだよね。

ダイエットの着地点が見えてきたようで、最近になくすっきりした気分。
そこまでやせて、あとはキープ。
そしたら、なみちゃんも安心してくれるんじゃないかな。

でも、なみちゃんは別れ際に付け足した。

「そうそう、その26キロの子、身長は150センチ台の前半だったんだって。
だから、比率的にはもう、そんなに変わんないんじゃないかなあ。
ホント、気をつけてね」

第26話

家族・・・その厄介なもの

スープだけの夕食を終えて、簡単な体操をしていたら、電話が鳴った。
イエ電にかかってくるのは珍しいから、セールスか何かかと思ったら、
東京の伯母から。

「なかなか遊びに来てくれないけど、元気？」
と、聞かれ、
「元気ですよー。なんか、毎日忙しくて、そちらに伺えなくてすみません」

そんなありきたりな会話をしたあと、
「元気ならいいんだけどね・・・」
なんとなく、伯母の口調が変わった。

「あなた、最近、かなりやせたみたいだけど、大丈夫なの？」

心臓が停まるかと思うほどの、衝撃。
伯母と最後に会ったのは、三ヶ月前で、今の私は知らないはずなのに・・・

否定することも忘れ、
「どうして、知ってるの？」
ついつい、自分がやせたことを認めてしまう。

「やっぱり、やせちゃったのね。
彩華ちゃんのお母さんから、いろいろ聞いて、心配してるのよ。
35キロとか、34キロとか、そんな体重だっていうけど、本当なの？」

その言葉で、すべてがわかった。

伯母の紹介で始めた、家庭教師のバイト。

生徒の彩華ちゃんとは、しょっちゅう、ダイエットの話をしてるから、それが伝わってしまったのだろう。

「先生、会うたび細くなるね。今、何キロなんですかぁ？」

なんて無邪気に聞かれて、いい気になり、
正直に答えてたことを悔やんだけど、後の祭り。

救いは、今の体重よりは多めの数字が伝わってたことだけど、それとて、
伯母には、見過ごせない数字みたいだ。

何しろ、二年前に入院させられたときと同じか、それ以下の少なさ。

それに、伯母は、私がこうなることを怖れて、上京に難色を示した私の母を、
説得してくれた立場でもある。

「こんな言い方したくないけど、がっかりだわ。

あんなに、もうダイエットはしない、って約束してくれたのに。
最初から、騙すつもりだったの？」

受験の本番中みたいに、頭の中をフル回転させて、言い訳を考える。

「ごめんね。本当に、本当に、ごめんね。

なんか、ストレスが重なって、食べられなくなっちゃって・・・

だけどね、最近、これじゃいけないと思って、頑張って食べてるから、
もうすぐ40キロ台に戻せると思うんだー」

しかし、伯母は、

「そう言われてもねえ。実際に、姿を見ないとね。

そうだ、今度、会いましょう。

私が近くまで行くから。

ねっ、それが一番安心できるし、あなたも後ろめたく感じなくて済むでしょ」

私にとっては、なんとしても避けたい提案。

だから、何も答えられずにいると、

「もし会えないって言うなら、あなたのお母さんにもこのことを伝えるけど、いい？
上京すること、応援した立場としては、放っておけないのよ。

わかるでしょ？

こんなこともわからない、って言うなら、もう・・・」

その言葉をさえぎり、

「わかりました。都合のいい日、連絡しますから」

泣きそうな声で、絞り出すようにひとこと。

そして、

「その言葉、信じていい？

なるべく、早く連絡ちょうだいね。

夕ごはんは、もう食べたの？ 何、食べたの？」

まだ話し足りそうな伯母を、

「これからお風呂なんです。さっきから、お湯があふれそうになってて」
嘘をつき、逃げるようにして、電話を切った。

そのあと、体操の続きをしながら・・・

どうして、こうなってしまったのか、考える。

カテキョのバイト、引き受けなきゃよかったのかな、とか。

いや、待てよ、

もしかしてこれ、伯母の作戦だったのでは・・・

きっと、そうだ。

新しいバイトを紹介してくれたとき、
ファミレスの徹夜仕事が心配だから、って言ってたけど、
じつは、知り合いの娘のカテキョをさせることで、
私がダイエットしないかどうか、それとなく監視するつもりだったのでは・・・

伯母の気持ちはわからないでもないけど、なんか、わずらわしい。
この調子だと、私の親にだって、すでに伝えてあるかもしれないし。
私に会うのも、確認作業のひとつ、にすぎなかったりして。

でも、伯母のことはまだいい。
最大の問題は、いずれ、ダイエットしてることが親にもばれるだろう、ってこと。
そうなれば、また、厄介なことになる。

思えば、この四ヶ月、自分の世界に没頭できて、すごく幸せだった。
なみちゃん以外に友達がいなくて、クラスで浮いていることも、
S先輩とのデートが「食べる食べる」であまり楽しくないことも、
親にいろいろ干渉されることに比べれば、全然大したことないもの。

やせたことがわかれば、少なくとも、母親はこっちに来て、
いろいろおせっかいを焼くだろうし、
下手したら、また入院させようとするかもしれない。

そういう厄介さから逃れるためには、伯母の前で少し太った姿を見せて、安心させる方法もある。

だけど・・・

せっかくやせてきたのに、無理して食べて胃が大きくなって、リバウンドしたら大変だし、そんなの絶対、イヤだ。

どんよりした気分のまま、お風呂に入り、体重を計ったら、33.9キロ。
ついに、33キロ台突入！

新記録更新は、100パーセント嬉しいはずなのに、
伯母の電話のせいで、3パーセントぐらい、憂鬱な気持ちが混じってる。
だって、これでもう、34キロ台には戻せないから。

伯母に会うとき、この体重で、
元気そうに、そんなにやせてないように見せるには、どうすればいいんだろう。

いくら考えても、完璧な答は浮かんでこなかった。

第27話

恐怖のバイキング

伯母と会う約束をどうするか、決めかねたまま、別の憂鬱が襲ってきた。

彼との週末デート。

というより、私にとっては無理に食べさせられる苦行の時間。

平日の食事量を減らして調節しているものの、正直いって、うっとおしい。

でも、私がなかなか太らない（むしろ、少しやせた？）ことが、彼には不満みたいで。

「今度、ホテルのバイキングに行ってみない？」

なんて、提案をしてきた。

バイキング＝食べ放題、ってことだから、もちろん、気が進まなかったけど・・・

ふと、思い直す。

もしかしたら、好都合かもしれない。

好きなもの、っていうか、カロリーの少ないものだけ食べることもできるはずだから。

と、すれば、せっかくの高級ホテルでのデート、めいっぱい楽しまなきゃ。

そうだ、あのワンピースを着よう。

先月、バーゲンで買ったヤツ。

トップがキャミソールで、ボトムの丈もいい感じに短くて、すごく可愛い。

難点は、この手の露出が大きい服って、肩や腕がたくましく見えがちなことだけど・・・

体重を計ったら、33.1キロ。

二の腕をつかんだ感触とか、鎖骨の出方も悪くない。

彼の前では、こういうタイプの服を着たことないから、サプライズにもなるかな。

そのうち、気分も少しウキウキしてきて・・・

日焼け&冷房対策のジャケットをどれにするか、鏡の前で選びながら、
バイキングのシミュレーションを試みる。

野菜中心にお皿をいっぱいにして、300キロカロリー以下に抑えて、
そうすれば、デザートも1個ぐらいいは食べられるかも。
なーんて。

しかし・・・・・・・・

現実には甘くなかった。

天井が高くて、明るいトロピカルムードのホテルのレストラン。

料理さえなければ、素敵なのに。

大量の料理を見て、そのにおいを嗅ぐだけで、吐き気がしてきた。

それでも、計画通り、野菜やきのこ、海藻系でお皿をいっぱいにながら、
たくさん食べてるふりを懸命にしていたのに、

「またそんな、カロリーのなさそうなものばかり、取ってきて・・・」

すぐにチェックが入った。

そして、炒飯やら、鳥の唐揚げやら、食べたくない料理をいろいろ運んでくる。

目の前に置かれた以上、箸をつけないわけにもいかず・・・

彼が時々いなくなる隙を見ては、
バッグの中にあらかじめ用意しておいたビニール袋に捨てたりしたけど、
ありえないほど食べてしまった。

しかも、嫌いになったはずの炒め物や揚げ物を、途中からおいしく感じ始めた自分がいて・・・

もしかして、過食の始まり？
そんな恐怖が襲ってきた瞬間も。

実際、一個のつもりだったデザートを、四個も食べてしまった。

「けっこう食べられたじゃない。バイキング、正解だったね」
食後のコーヒーを飲みながら、ゴキゲンな彼。

でも、私は後悔でいっぱい。
3キロぐらい太った気がして、肩や腕にもお肉がついたみたいで。
そういえば、今日の服について、彼は何も言ってくれてない。
どう思ってるんだろ？

レストランに着いて、ジャケットを脱いだとき、視線は感じたのだけど・・・

「ちょっとトイレ、行ってくるね」
彼が席を立ったので、戻ってきたら、聞いてみよう、そう思ったとき・・・

隣のテーブルから、声が聞こえてきた。

「ねえねえ、見て。拒食のコがいる」

「ホントだあ。やっぱーい」

「でもさー、なんで、拒食なのにバイキングに来てんの？」

「たぶん、あれだよ、いっぱい食べて吐く、ってやつじゃない」

「きったなーい。じゃあ、今から吐きに行くのかな」

同じ年くらいの女の子二人組が、自分のことを言ってることはうすうすわかったけど、わざと、聞こえていないふりをしてみる。

空になったコーヒーカップを口に運んだりして。

「なんかさ、キャミがガバガバじゃない。ありえないよねー」

「うんうん、腕とか、筋が見えちゃってるし。正直、きもーい」

「はっきり言って、こういう店、来てほしくないよー」

「だよなー。料理、まずくなっちゃう」

だんだん、腹が立ってきた。

アンタたちの感想なんて、聞きたくもない。

彼の感想も、まだ聞いていないのに。

ふたりとも、けっこうぽっちゃりしてるけど、バイキングなんて来てて大丈夫？

どーせ、ここまではやせられないでしょ。

そうだ、もし、今、聞こえていないふりをやめたら、あわてるだろうな。

と、考えて、二人のほうをにらんでやろうとしたら・・・

第28話

続・恐怖のバイキング

会話が、パタッと止まった。

彼が、戻ってきたからだ。

入れ替わりにトイレに行くつもりだったけど、やめることに。

吐きに行ったと思われるのは、シャクだもの。

二人の会話の最後のほうは、彼も聞こえてたみたいで、

お店を出たあと、

「大丈夫？ いろいろ言われてたみたいだけど」

優しい言葉をかけてくれた。

「うん、大丈夫。全然気にしてないから」

笑顔で答える私。

でも、彼の口からは、想像もしない言葉が。

「いや、少しは気にしたほうがいいよ」

「えっ・・・」

きょとんとする私に、彼は重い口調になって、

「さっきの連中はサイテーだけどさ、同じこと、感じてる人はけっこういるんじゃないかな。

どう見ても、やせすぎなんだし。

今日の服も可愛いけど、もうちょっと太らないと、似合わないよ」

要は、ダメ出してことだ。

お店で言ってくれなかった感想を、こんな形で聞くことになるなんて・・・

しかも、そのあとに待っていたのは、服へのダメ出しよりショックな言葉。

「街歩いててもさ、いろいろ言われるじゃない。

ひそひそ声で。

ああいうの、全然気にならないの？

俺はすごく気になるんだけど・・・」

「気にはなりますよー」

自分でもよくわからないまま、話をこじれさせたくなくて、彼に合わせてみる。

「だったら、頑張って太ろうよ」

お説教を聞き流しながら、ひどく虚しい気持ちになってしまっ

彼は、今の私を連れて歩くのがイヤなんだ。

たしかに「きもーい」なんて言われるような女の子、イヤだろうけど。

でも、本当に好きなら、どんな体型でも愛せるでしょ。

結局、この人は私の外見を気に入ってくれただけで、中身は見てくれてない。

いろいろ言われるのがイヤで、太らせたいだけなんだよね。

別に私のこと、本気で心配してるわけでもないんだ・・・

「来週は会えないけど、その次の週はまた、さっきの店にしようか。

二週間、ちゃんと食べるんだよ。

ちょっと頑張れば、みんながうらやむ体型に戻れるはずだからさ」

彼の誘いに、テキトーに答えるうち、私のなかでひとつの結論が出た。

この人とは、別れよう。

でも、私から言い出すと、彼が傷つくかもしれない。

だから、もっとやせよう。

やせてやせて、彼があきれてしまうぐらいに。

20キロ台まで行っちゃえば、いくらなんでも、愛想つかしてくれるよね。

やせたい私にとっては、一石二鳥だ。

家に帰り、体重を計ったら、34.3キロ。

彼のせいで、1.2キロも太っちゃったけど、その分、減らし甲斐があると思えばいいや。

二週間で4キロ以上、どうやって落とそうか・・・

大変だけど、達成できない数字じゃない。

計画を練るうち、なんだか、ワクワクしてきた。

第29話

テスト期間の招かざる客

「すごーい。こんな完璧なノート、初めて見た！
助かるわ～。ありがと、ね」

同級生のわざとらしい言葉に、愛想笑いで答える。
それにしても、わざわざバイト先にまで、ノートを借りに来るなんて、
あつかましいというか、切羽詰ってるというか。
自分には、とても真似できないし、したくもない、って思う。

大学は今、テスト期間。
日頃、講義をサボりがちな人たちが、ノート探しにあせりまくってる。
そこで、目をつけられたのが、私。
講義は一回も休んでないし、ノートもけっこう真面目にとってるほうだから、
「コピーさせて！」の集中攻撃を浴びることとなった。

バイト先のファミレスまで来た、この子で五人目。
べつに、仲がいいわけでもない。
まあ、昼食の誘いを断ってばかりの私には、仲のいい同級生なんて、いないんだけど。

高校時代も、ノートを貸すことは珍しくなかった。
でも、相手は仲のいい子に限られてたし、
あいさつぐらいしかしない子と、ノートの貸し借りするなんて、あり得なかったよ。

だいたい、ふだんサボっておきながら、こういうときだけ、
他人の力に頼って解決しよう、という態度が理解できない。
自分のことは自分でやる、っていう発想、ないのかな？
それに、私のノート使って、テストを乗り切ったところで、
本当の知識は身につかないのに。

そんなことを考えながら、愛想笑いを続けていたからか、
この子も私に、お愛想を言ってきた。

「この店の制服、チョーかわいい！ スタイルいいから、チョー似合うねー」
不自然なほど「チョー」に力をこめた調子で。

でも、言われた内容ほど、嬉しさを感じない。
だって、この子、私がもっと体重あったときにさえ、
「なんで、お昼一緒に食べないのお。それ以上やせると、男の子に引かれるよー」
なんて、ずけずけと言ってきたことがあるもの。

デリカシーがないっていうか、要は中年のオバサンみたいな性格。
だから、自分の都合であつかましくノート借りに来たりできるんだ。

やっぱり、この子のことはちょっと好きになれない。

いっそ、ノート貸すの拒否しちゃえば、面白かったかも、という意地悪な考えがよぎる。

とはいえ、私も、ここで恩を売っておけば、これから付き合いやすくなるかな、なんて、自分なりの計算をしていたりして。

大学くらいになると、ある意味、オバサン同士みたいな付き合いをするようになってっちゃうのかも、
って、ふと気づいた。

とりあえず、お愛想にはお愛想で、ということで、

「それ、ホント～？ 似合ってるといいんだけどぉー」

心のない返事をわざとらしくしながら、自分もオバサンになった気がして、イヤな感じ。

でも、もっとイヤなのは・・・

結局、相手に合わせてしまう、自分の八方美人なところだ。

いい子に思われたくて、嫌われたくなくて、

好感情を持っていない相手にも、イヤと言えない。

それが、あとですごくストレスになったりするのに。

同級生が帰ったあと、休憩時間に、愚痴ってみた。
もちろん、なみちゃんを相手に。

そしたら、
「私もおんなじだよー。
頼まれごと、絶対断れないもん。
ノートも利用されまくってるしさあ」
同類がいたことに、少し安心しながら、
だからこそ、なみちゃんとは気が合うんだ、と思った。

でも、そろそろ変わりたい。
ダイエットして、少しは性格変わるかと思ってたのに、全然、だもの。
食べたくないものを拒否するように、付き合いたくない人も拒否できるようにならなきゃ。

それはそうと、なみちゃん、ちょっと太ったみたい。
私は前の、きゃしゃすぎる感じが好みだけど、今のほうが男の子受けする可愛さかもしれないな。
本人も「40キロ台になりたい」なんて言ってたし、納得の逆ダイエットだったりして。

それにしても、何キロ太ったんだろ？
前はたしか、37キロだったはずだけど、今は何キロなのかな？
無性に聞きたくなかったけど・・・なんとか、思いとどまった。

そういうこと、気安く聞くのって、さっきの子と一緒に、オバサンみたいだもん。
心もカラダも、オバサンにはなりたくないから・・・

第30話

邪魔者は消えて！

テスト期間は誰にも邪魔されず、ダイエットに専念できたから、
体重がけっこう落ちた。

31.9キロ。

記録更新。

あと2キロ落とせば、20キロ台！

なのに、彼(=S先輩)とのデートでたくさん食べさせられ、
33.2まで戻ってしまった。

もう、イヤ！

前よりやせたはずの私を見て、そろそろ見放してくれると思ったのに、

「なんか、こないだよりやつれた感じだけど、大丈夫？

テストも終わったことだし、頑張って太ろうね」

太ろうね、って言葉を聞くだけで、私の心の中は大パニック。

彼はなかなか、私を太らせることをあきらめてくれない。

つらいよ。

それでなくても・・・

あの悪夢のような夜のせいで、彼のことがさらに疎ましくなっているのに。

じつはあのあと、生理が来ていない。

高校のときにダイエットした経験から、そろそろ止まる頃だと思っていたし、
やせた証しなら、むしろ喜ばしいことなのだけど・・・

エッチしたのはまぎれもない事実。

しかも、彼は避妊具を使ってなかった。

まさかとは感じながらも、数日前、妊娠検査薬で確かめてみることに。

結果は大丈夫だったものの、なんでこんなことしなくちゃいけないんだろうって、涙が出て。

正直って、この人につきあっていても、いいことなんか何もない。

彼だって、生理もなくなるほどやせて、食事もエッチ也大嫌いな女の子につきあってても、
何もいいことないでしょ。

だから、私のほうから、関係を断つことにした。

もうすぐ、東京の伯母とも会わなきゃならないし。

私がダイエットしてることについて、伯母をうまく納得させないと、
実家の親に報告されてしまうから。

面倒な関係は、少ないほうがいい。

そう思って、彼に手紙を書いた。

今までのお礼と、お付き合いを終わりにしたいというお願いと。

なるべく彼が不快にならないよう、自分がいかにいたらない恋人だったかを、
いろいろ綴っていくうち、涙が止まらなくなって・・・

そう、私はダメな子なんだ。

自分にはもったいないような人に好きになってもらったのに、
楽しませるところか、わずらわしい思いばかりさせたあげく、
自分から、別れようとしているなんて。

「今の私、ダイエットしか、頭の中にないんです。

太るなんて、絶対ムリ。

先輩がいいと思ってくれる体型にはなれっこないし、
一緒に食事をしても、うんざりさせるだけですよね。

だから、私のこと、見放して下さい。

先輩には、もっとふさわしい女の人がいくらでもいるはずだから」

彼のことはひとことも悪く言ってないから、不快にはならないよね？

男性との交際自体、生まれて始めてだから、こんな別れ方でいいのかな、
なんて不安に思いつつ、なんとか書き終え、投函すると、少しホッとした。

これで、面倒な関係から、ひとつ、解放されるんだ・・・

数日後、彼から「会って話そう」というメールが来たけど、
会って気持ちがぐらつくのと、そこで何か食べさせられるのがイヤで、
「電話にしてください」と、返した。

すぐに電話が来て、彼は考え直すようにいろいろ言ってきたけど、
私はただただ、泣きながら謝るばかり。
そのうち、彼もあきらめたみたいで・・・

「わかったから、最後にひとこと言わせてね」
と、お説教をひとしきり。

「キミのやってることって、もう、ダイエットじゃないから。
自分の体、ダメにしてるだけだからさ。
最近、階段昇るのもきつそうだし、
歩いてて、かかとが痛くなるのも肉がなさすぎだからじゃない？
このままだと、学校にもいけなくなるし、下手したら、死んじゃうよ。
短い間でも付き合った者としては、そんなことになってほしくないし。
自分が危険なことやってること、気づかなきゃダメだよ！」

今までになく激しい語気だったけど、私は、これで終われるんだ、
という安堵の思いで、聞き流すだけ。

それより、彼が付け足したひとことに、少し憂鬱にさせられた。

「あ、そうそう、サークルまでやめるなんて、言わないでね。
プライベートとは別、だからさ。
振られた上に、自分のせいで部員が一人減るなんて、
踏んだり蹴ったりっていうか、副部長としては、責任問題だから（笑）
今度の合宿、ちゃんと参加するって、約束してくれる？」

そうだ、八月上旬に、三泊四日の合宿があるんだ・・・

「はい、行くつもりです・・・」

これ以上、話をややこしくしたくなくて、そう答えたものの、
正直いって、面倒くさい。
その頃には、もっとやせていたいけど、テニスをするには体力も必要だし。
合宿はとりあえず行くとして、先輩(もう、彼じゃない)とのほとぼりが冷めたら、
サークルもやめることにしよう。

恋もサークルも、ダイエットには邪魔だから。

伯母とのことも、いざとなれば無視すればいい。
それで、嫌われてしまったとしても、私には、ダイエットが残るから。

それで十分、だもの・・・

第31話

伯母の奇襲

「先生、さっき送ったメール、読んでくれた？」

カテキョの生徒の彩華ちゃんに、いきなり言われた。

えっ、何それ？

そういえば、出かける前にストレッチをしていたりして、時間がなくなり、ケータイをチェックする間もなかったっけ。

「あ、ごめんね。今、見るよ」

その内容を目にした瞬間、真夏なのに、背筋が凍りつきそうな気がした。

「せんせいのオバサンが、今日来るみたいだよ。だいじょうぶ？？？ 彩華より」

あわてて、頭の中を回転させ、事態を理解しようとする。

でも、どういうことかはすぐに呑み込めた。

私が会う約束を先送りし続けることに、業を煮やし、

知り合いでもある彩華ちゃんのお母さんに会うということにかこつけて、私の様子を見に来たんだ、そうに違いない。

それがわかったから、彩華ちゃんもメールで知らせてくれたのに。

メールを見ていれば、長袖の服にするとか、少しは工夫できたのに。

授業を始めても、伯母のことが頭から離れず、
途中、彼女らしき来客の気配を感じてからはもう、勉強を教えるどころではなくて。

でも・・・驚いたのは、伯母も同じかもしれない。

私がつとめて平静を装いながら、
「こんばんは一。なんか、ご無沙汰しちゃって・・・」
と、挨拶したのに対し、私の全身をまじまじと見つめたあと、
「・・・どうしちゃったの？」
震える声で絞り出すように、ポツリ。

どう言い繕うか、思いをめぐらせていると、
「マンションまで送るから、車の中で話しましょう」
とても断れそうにない語気で、切り出され、
そのまま、伯母の車に乗り込んだ。

そして・・・
「今、何キ口あるの？」

「んー、38キロぐらいかなあ」

「嘘おっしやい。

二年前、35キロで入院したときより、やせてるじゃないの！

腕なんて、骨と皮。

顔にも、変な皺ができてるわよ」

「・・・そっかなー。

最近、体重計ってないから。

たしか、一週間前に計ったときは、それぐらいだったんだけど・・・」

嘘だらけの、苦しい言い訳。

でも、二年前よりやせてる、という言葉が心地よく響く。

そう、伯母が興奮すればするほど、私はなぜか冷静、というか、醒めていく感じ。

だから、かな。

「もう、いいわよ。

とにかく、明日、一緒に病院いきましょう！

あなたのお家にも知らせないと！！」

有無を言わせぬ勢いで言われても、不思議なほど、すらすら嘘がつけた。

「あ、じつはね、こないだから、病院通ってるんだー。

カウンセリング主体の心療内科なんだけどね。

ほら、前に入院したときは、点滴とかで体重増やすだけの治療だったでしょ。

なぜやせたいのか、っていう心の問題まで診てもらえなかったから、

また逆戻りしたのかな、って。

心の問題が解決すれば、自然と体重も増やせるみたいだから、

今回はそういう方向で頑張ってみたいの。

お盆に帰省するとき、お母さん達を心配させたくないし。

だから、家には連絡しないで！　お願い！！

お盆までには、絶対、40キロ台に戻るから。

ねっ、一生のお願いです」

最後のところは、涙声になり、ちょっとした迫真の演技。

「・・・・・・・・」

伯母はしばらく黙っていたけど、

「本当に信じていいのね。

あなたが嘘をつけない性格だってことは、十分わかってるから・・・

うん、信じることにするわ。

そのかわり、お盆にはちゃんと体重戻して、お母さん達を安心させてあげてね！」

最後は、納得してくれた。

「じゃあね。ちゃんと、食べるのよ！」

いつもなら、大嫌いな言葉にも、

「ハイ、頑張ります！」

優等生のお返事。

少しでも元気に見えるよう、笑顔で手を振って。

やっと、お別れ。

・・・ふっ。

危ないところだった。

マンションで一人になり、安堵のため息をつく。

それにしても、さっきはなぜ、あんなにうまく嘘がつけたんだろう？

伯母が知ってる私は「嘘がつけない」はずなのに。

ダイエットを再開して以来、嘘がうまくなった気がする。
なんていうのかな、やせたくて仕方ない私のために、別の私がどこかにいて、
いろいろ指示してくれてる感じだ。

ただ、大好きな伯母を騙すのは、やっぱり後ろめたい。
騙さない形にするには、病院に行って、体重増やすしかないけど・・・

ほんの一瞬、よぎったその思いは、裸になり、鏡の前に立った瞬間、吹っ飛んだ。
伯母は「骨と皮」って言ってたけど、全然、そんなことない。

体重も、31.7 キロ。
20キロ台までは、まだまだだから、もっとやせなきゃ。

ただ、あさってから、サークルの合宿だし、
それまでは、30キロ台をキープしておいたほうがいいかも。
合宿が終わったら、サークルもやめるつもりだから、
ダイエットに専念できるはず。

それでいいんだよね？
自分に問いかけたら、

大丈夫、絶対、やせられるよ。
ここまで来たんだから、頑張ってやせなきゃね！

別の私からの、エールが聞こえた。

第32話

S先輩の嘘

サークルの合宿から帰ってきて、三日。

いろんなことがありすぎて、まだ整理ができていないのだけど、
整理するためにも、思い出してみる。

まず、行きのバスからして、気分は最悪だった。
バイトの徹夜明けで寝てなかったせい、
テニスをするための筋力をつけるために、卵の黄身などのたんぱく質ばかりを食べたせい、
胃の調子がおかしく、車酔いも手伝って、戻しちゃうような感じ。

でも、そんなことになったら、食べ吐きを疑ってる人たちが何を言い出すかわからない。
必死の思いで持ちこたえたものの、宿泊先の温泉旅館に着いた途端、
全身のだるさと、頭のふらつきで、テニスどころではなくなった。

そこで、この日の練習には参加せず、部屋で休むことに。
そのまま、眠り込んでしまった私が、目覚めたのは夜七時すぎ。
たぶん、他の人たちは夕食で盛り上がってるはずだ。

でも、旅館の豪勢な夕食なんて、絶対に食べたくない。
(だって、見るだけでも太りそうなんだもん・・・)

吐き気はもう治まってたけど、私はお風呂に行くことにした。
この流れなら食べずに済みそうだし、その分、ゆっくり半身浴でもすれば、やせられるから。

露天風呂には他に誰もいなくて、星空も独り占め。

このところの気苦労も、少し消える気がする。

でも、そんな平和な静寂は、けたたましい話し声によって破られた。

同じサークルの女の子たちが食後のひと風呂を浴びにきたのだと、

すぐに気づいた私は、奥のほうに移動。

そこは男風呂とつながっていて、カップルが混浴するための隠れスペースになっている。

ここであの人たちと顔を合わせるよりは、知らないカップルに出くわすほうがいいや。

で、願わくは、あの人たちが私に気づかず、出て行ってくれれば最高。

そんな気分でいる私の耳に、ひっかかる会話が飛び込んできた。

「あのガリ子、とうとう倒れたね」

「そりゃ、倒れるって。

歩けてるのが不思議っていうか。

脚とか、ウチらの腕くらいでしょ」

ガリ子、って・・・もしかして、私のこと？

「あそこまでやせると、気持ち悪いよね」

「そんなこと言っちゃって、あんた、同じクラスでけっこう仲いいんじゃないかった？」

「んなことないって。」

仲よくするのは、テストのときだけ。

あの子、異常なくらい丁寧にノート取ってるからさー」

「ふーん、ガリガリでガリ勉なんて、サイテーじゃん（笑）」

聞くに堪えない会話だ。

私のおかげで助かったくせに、サイテーなのは、そっちじゃないの！

でも、せっかくだから、

この機会に本音を聞いてやろうじゃない、という興味も沸いてきて・・・

「だからさー、また、学年末のテストで世話になんなきゃならないから、

それまでは仲いいふりしとかなないと」

「でも、その頃にはもう、この世にいなかったりしてね」

「やだぁー（笑）」

ちょっとー！ 勝手に殺さないでくれる？

でも、ここまで嫌われてるとは。

ショックで、耳をふさぎたくなる。

そんな私の耳に、もっと聞きたくない想定外の言葉が・・・

「けどさー、合宿によく来れたよねー。

S先輩に振られたばかりなんでしょ」

「あー、そうらしいよね。私なら、サークルもやめちゃってるよー」

第33話

続・S先輩の嘘

一瞬、耳を疑った。

お付き合いを断ったのは私からだったはずなのに。

これって、どういうこと？

「あのさ、私の友達がS先輩の友達と付き合ってるじゃない。

で、いろいろ聞いたんだけど、なんか、大変だったみたいだよー」

「大変、って？」

「自分からアタックしてきたくせに、いざ付き合いが始まると、

デートも二の次で、ダイエットにハマりまくりで」

「あれって、もう、ダイエットなんてレベルじゃないでしょ」

「うん。だから、先輩も心配して、ちゃんと食べるように言ったらしいんだけど。

全然、聞く耳持たない感じで、逆ギレするんだって。

最後はもう、先輩も疲れ果てて、逃げ出したみたいだよ。

頼むから、別れさせてくれ、って」

半分以上、事実とは違ってた。

たしかに、ダイエットのことでは先輩を振り回したかもしれないけど、

自分からアタックしたり、逆ギレした覚えはないし、

これ以上振り回したくなくて、私から終わりにしたんだもの。

いったい、どうして、そんな嘘をつくんだろ・・・

「先輩が言うには、今までいろんな子とつきあったけど、
あんな変な子、初めてだって」
「モテるんだから、何もあんな子とつきあわなくてもよかったのにねー」

ふと、気づいた。

先輩にとって、相手から別れを切り出されることなんて、滅多にないことじゃないか、と。
それも、私みたいな子から。
たぶん、私は先輩のプライドをズタズタにしちゃったんだ。
それで、まわりの人に嘘をついたんじゃないのかな・・・

そんな想像をするうち、やりきれない思いがこみあげてくる。
そして、涙も。
すすり泣きの音が聞こえないよう、嗚咽を我慢しながら、
この合宿が終わったら、絶対にサークルをやめる、って決めた。

人間関係って、なんでこんなに面倒なんだろ・・・

やっぱり、こんな嘘だらけな世界とは訣別して、ダイエットに専念しよう。
頑張れば頑張っただけ、結果が出るダイエットの世界は、
もっとシンプルで、私を裏切ったりしないから。

「そろそろ、出よっかー」

「うん、そっだね。

で、売店行ってアイス食べよー」

「さっき、あんなにボリュームたっぷりの夕食食べたのに。

絶対、太っちゃうよー」

「いいのいいの。

ガリ子みたいになるより、好きなもの食べて太ったほうが、全然、幸せだもん」

「だよねー。

うん、私も何か、デザート食べるとすっかぁ（笑）」

まるで、私に言い聞かせでもするようなやりとりを残し、お風呂から上がる気配の彼女たち。

もちろん、私が近くにいることを知ってたら、

偽善的なきれいごとしか言わないんだろうけど。

でも、あの人たちのほうが幸せだとは、全然思えない。

陰でこそこそ、人の悪口言って、食欲もコントロールできずに。

そんなだらしのない人たちより、私のほうが、絶対、幸せだ。

彼女たちの気配が脱衣場からも消えるのを確認して、立ち上がろうとしたら、

あっ・・・

一瞬、立ちくらみがして、転びそうになった。

そのとき、変な足の着き方をしたせいで、かかとに激痛が・・・

でも、大丈夫。この程度は慣れっこだから。

湯船の外で、夜風に当たってればすぐに治るはず。

そうだ、気分が治まったら、もうしばらく半身浴していこう。

あの人たちみたいにならないよう、もっともっと頑張らなきゃ。

第34話

ついに・・・・・・・・

合宿初日の夜。

お風呂には、結局、二時間ぐらいいただろうか。

脱衣場に戻ると、誰もいない。

よしよし、と思いながら、いつもの儀式を行った。

体重測定。

今朝は30.6キロだったけど、夕食を抜いた分、百グラムでも減ってるといいな。

そんな期待を胸に、体重計に乗ってみたら・・・

29.7キロ。

初めての20キロ台！

まさか、こんなところで記録できるなんて！！

飛び上がりたいほど嬉しい気持ちと、いつもと違う体重計だからにわかには信じられない思い
。

でも、やっぱり、嬉しい！！

30キロを切ることが、目標だったから。

感激を繰り返し味わいたくて、何度も体重計に乗ってみる。

さっき、聞くハメとなったサークルの人たちの会話なんか、もう、どうでもいい感じだ。
いや、これもお風呂でいっぱい汗をかいたおかげだと思えば、
長湯の原因を作った彼女たちに、むしろ感謝したい気分だったりして！？

鏡に映る自分の体も、心なしか、やせた気がするし、
浴衣の帯が幾重にもぐるぐる回るのが、なんともいえない快感。

せっかく手に入れた20キロ台の体を、1グラムたりとも太らせたくなくて、
いつもお風呂上りにする水分補給も、今日はやめることにした。
じつは、ものすごく喉が渴いてただけど・・・

念の為、簡単な運動もしておこう。

そうだ、階段の昇降がいいな。

ちょっとのぼせたのか、さっきから全身がだるいけど・・・

広い建物の中で、客室から一番遠い階段を選び、一階から三階までを行ったり来たり。
とりあえず、10往復することにする。

昇りは手すりなしではつらいし、降りのかかとで着地するたび痛みが走るけど、
20キロ台を維持するためなら、全然平気。

そうやって、7往復目の昇りにさしかかったとき・・・

突然、息が苦しくなり、目の前が真っ白になった。

手足がしびれ、足元がよろめき、手すりを持つ力も抜けて。

腰と背中を、階段に強く打ちつけ、激痛・・・・・・・・

そこで、意識がなくなった。

何処までもやせたくて②

<http://p.booklog.jp/book/64000>

著者：エフ／宝泉薫

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yfujiiwara/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64000>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64000>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ